

## 地域変動下の地域ケアミックスの課題と可能性

### ーケアリング関係の視点からの高齢者支援ー

○ ルーテル学院大学 山口 麻衣 (5165)

森川 美絵 (国立保健医療科学院・3249)、山井 理恵 (明星大学・1719)

キーワード：高齢者支援、地域ケアミックス、ケアリング関係

#### 1. 研究目的

地域包括ケアの推進が我が国の高齢者ケアにおいて重視されているが、それぞれの地域の置かれた状況や社会資源の格差を考慮する必要がある。ここでは地域という場におけるケア資源の多様性を示す概念として地域ケアミックスに焦点をあて、フォーマルなケアだけではなく家族などによるインフォーマルなケアも含めた多様なケアの形態や供給源の在り様をとらえた。本研究の目的は、ケアリング関係の視点からみた高齢者への生活支援を把握し、地域変動下における地域ケアミックスの課題と可能性を探ることである。個々人のケア資源の多寡によりケアミックスやケアリング関係にどのような違いが生じているのか、それらは生活の場である地域の変動によりどう影響されているのか、高齢者本人の生活を支えるためにどのような地域での条件整備が必要なのかを、ミクロな視点とメゾ・マクロな視点をつなげながら実証することを試みた。

#### 2. 研究の視点および方法

本研究はケアリング関係の視点により、日々の生活やケアが行われる場におけるケアの担い手と受け手の相互関係的なかわりから、日常生活のミクロな関係性に対する解釈を試みた。研究方法は地域実証研究であり、北海道夕張市を地域事例のモデルとしたフィールド調査を実施した。炭鉱として栄えた夕張市は閉山、財政破たん（2007年より財政再建団体）、人口流出・少子高齢化（人口高齢化率2012年44.5%）などの社会変動により地域社会や生活の変容を余儀なくされている。夕張における調査では、高齢者・家族介護者・ケア従事者・地域関係者・行政へのインタビュー、参与観察、行政等の関連資料の分析を中心とした。本報告では2010年第二次調査と2012年調査第三次の結果を中心にまとめた。

#### 3. 倫理的配慮

本研究は筆頭報告者の属する大学の研究倫理委員会の審査を受け、承認を受けて行った。個別インタビューはプライバシー保護などを説明のうえ、書面にて同意を得た。

#### 4. 研究結果

高齢者や介護者等へのインタビュー調査から、地域社会の変動の影響は住民の生活そのものを脅かすものであり、財政難によるフォーマルサービスの縮小、インフォーマルなケアを含め乏しい社会資源により、独居や夫婦のみ世帯を中心とした高齢者の日常生活に困難が生じていることが確認できた。困難な生活を支えるためのケアリング関係も独居を支

えるフォーマルな担い手との関係など多様な関係性の構築を模索しながらも、関係性の維持に困難を伴うものもみられた。

また、資源の乏しさへの対処として、創意工夫と多様な連携により資源を掘り起こし、活性化する実践もみられた。幾つかの事象をあげてみると、第一に、利用者と担当者へのインタビュー調査から、ケアマネジメントのシステムにおいて利用者のニーズを満たすために制度外の対応など家族への日常生活支援、インフォーマルなケアを支援する対応をしていた。第二に、独居高齢者が多く地域のつながりが困難な中、緊急時の取り組みとして「命のバトン」(救急医療情報キット)事業を実施していたが、これは再生市民会議や社協といったボランティアな担い手が連携して高齢者に安心を与え、セルフケアを高める取り組みといえる。第三に、自治体のコンパクトシティ化計画が始動したばかりで新たなサービス付住宅が利用開始されていたが、安心できる住まいの提供の重要性とともに住み替えの難しさも伺えた。第四に、在宅医療と介護サービス利用者や関係者への調査から、夕張希望の杜を核とする「ささえる医療」への転換にむけた取り組み(定期巡回型24時間訪問介護事業等)からは、在宅医療・介護連携を軸とした予防的なかわりにより日々の暮らしを支え、緊急時対応や終末期ケアまで視野にいたれた、継続的なケアリング関係の構築により、地域のケアミックスが有機的に連携されながら進化していることがうかがえた。

## 5. 考察

地域ケアミックスは多様な担い手間の役割分担にとどまらず、担い手間の柔軟で有機的な連携によるダイナミクスにより形成され、発展していることがわかった。またセルフケアをフォーマルとインフォーマルな担い手が予防的に支える中で地域ケアミックスが機能していた。信頼関係のある多様なケアリング関係の継続なかで新たな資源の創出や弱体化した資源の維持をも含む地域ケアミックスが育まれることが示唆された。地域ケアミックスの課題と可能性の論点として、(1)ケアリング関係を支える取り組み、(2)地域包括ケア推進にむけた多様なケア資源の確保・創出・活性化、(3)地域での予防的ケア・早期対応を含めたケアの質の向上のための取り組み、(4)行政・専門職・市民のそれぞれの役割(特に行政の役割)とそれらを繋ぐ責任の所在の明確化の必要性があげられる。本研究で得られた知見は夕張特有のものもあるが、困難に対処する可能性を示している面もあり、超高齢化の進む今後の我が国の過疎地域のあり方を検討する上でも参考となることも多い。夕張もさらに変化しつつあり、継続調査であるものの調査上の限界があり、さらなる調査が必要である。これらの限界はあるが、本研究により地域包括ケアの推進のうえで、地域ケアミックスの課題と可能性についてさらに議論を深めることが重要であることがうかがえた。本報告は、平成22-24年度科研費(基盤B)「地域変動下の地域ケアミックスの課題と可能性—ケアリング関係の視点からの高齢者支援」(研究代表者 山口 麻衣)の研究成果の一部である。他の共同研究者は笹谷春美(北海道教育大学名誉教授)・永田志津子(札幌国際大学短期大学)・斎藤暁子(日本学術振興会)である。